

令和7年度体外受精卵移植技術者会議開催！

○はじめに

令和7年11月14日令和7年度体外受精卵移植技術者会議を開催しました。本会議においては令和6年度移植受胎調査データの集計結果等をご報告、併せて特別講演といたしまして、ふくおか県酪農業協同組合 ETセンター長 梶原 隆幹先生に「暑熱期の受胎牛を増やすために」というテーマでご講演頂きました。今回の卵通信ミニでは本会議の中から①「令和6年度受胎状況について」②「夏場の受精卵移植対策について」を一部抜粋しご紹介したいと思います。

令和6年度受胎状況について

表1 体外受精卵の受胎成績の変遷

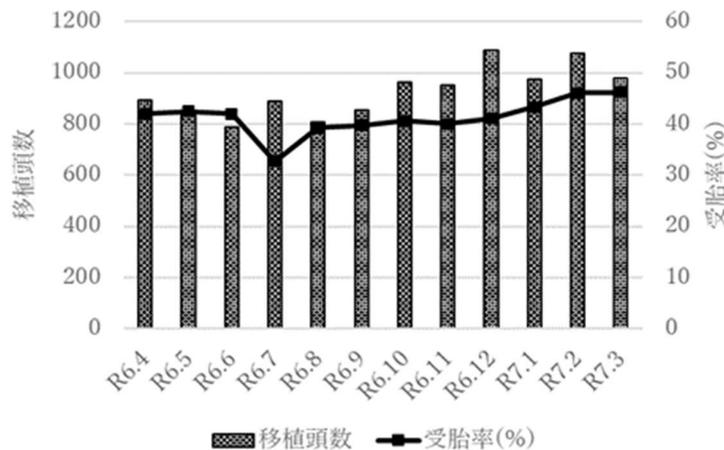
種類	凍結卵			新鮮卵			総計		
年度	R4	R5	R6	R4	R5	R6	R4	R5	R6
移植頭数	4,457	5,020	4,817	9,276	8,336	6,281	13,733	13,356	11,098
受胎率(%)	38.9	40.4	43.7	40.8	40.4	39.6	40.2	40.4	41.4

※移植頭数は妊否不明頭数を含む。受胎率は受胎頭数/（移植頭数－妊否不明頭数）の百分率で示す。

各モニターを中心にご提供頂きましたデータ 11,098 件を集計し、令和6年度の受胎率は凍結卵が43.7%、新鮮卵が39.6%、総計が41.4%となりました。

直近3年間の受胎率は凍結・新鮮共に40%前後で安定しており、特に凍結卵の受胎率は少しずつ年々向上している結果となりました。(表1)

図1 受胎率と移植頭数の月別推移



月別の受胎率は7月に一時的に受胎率が低下し、8月には復調、それ以降は冬季にかけて緩やかに回復傾向となりました。7月に受胎率が低下した理由は様々あると思いますが、本会議では暑くなり始めの6月のストレスが7月に現れ、8月以降は体が順応することで回復するのではないかと、7月の受胎は春産みにつながり、分娩・哺育・出荷等の関係から農家の希望により卵巣の状態が多少悪くても移植しているため受胎率が下がるといった話等も聞かれました。(図1)

夏場の受精卵移植対策について

特別講演では、ふくおか県酪農業協同組合 ET センター長の梶原隆幹先生に「暑熱期における人工授精・受精卵移植の対策について」という演題でご講演いただき、夏場の受胎対策の実例をご紹介いただきました。

先ず、年々暑くなる夏場において、ふくおか県酪農業協同組合では人工授精から事業団の新鮮卵利用に切り替え夏場対策としていることが報告されました。この取り組みは一定の効果が見られ今後も継続して取り組みたいとのことでした。

併せて、管内での優良事例として屋根を二重にする「二重屋根」が最も効果的であったと報告され、他の参加者からも「湿度を上げずに温度を下げるができる」として注目されていました。(図2)

図2.二重屋根



おわりに

今回の会議や前号の卵通信ミニでも配信させていただきましたが「夏場の暑さ」への対策が話題に多く挙げられます。年々暑くなる傾向の中、各県・各地域ともに色々と苦労されており、同時に様々な取り組みをされているかと思えます。自分達の地域ではこんな取り組みをしている等のお声を聞かせて頂ければ幸いです。

また、移植関連器具においても日々進化しております。深部注入器を始め超音波診断装置(以下エコー)が広く利用されており、会議の中でも「10年未満のエコー無し移植師」と「10年未満エコー有り移植師」では後者の方がわずかに受胎成績は良く、「エコー有りの30年目の移植師」の受胎率は70%になったなど、エコーの有用性が示唆されました。

近年は血流量を色付きで確認し良質な卵胞・黄体かを判断できるカラードップラーや生殖器内を可視化・画面共有できるようなデバイスの開発も進められており、移植技術の高位平準化が期待されます。受精卵移植においては①受精卵の品質、②受精卵の状態、③移植者の技術レベルが受胎を左右するといわれています。当センターでは受精卵の品質の向上、優良事例の情報発信を通じて皆様に貢献したいと考えております

最後になりましたが、ご多忙の中、本会議にご出席頂きました先生方、またデータ提供にご協力をいただいた皆様へ厚く御礼申し上げます。貴重なデータ・ご意見として集計・分析を進めて、当団体外受精卵品質向上に努めてまいりたいと思いますので、ご協力宜しくお願いいたします。併せて今後ともに引き続き当団体外受精卵のご利用・ご活用いただきますようお願い申し上げます。

尚、本会議詳細は今月発行予定のLIAJNEWS 215号に掲載しますので、そちらも併せてご参考下さい(家畜バイテクセンター)